

静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関するアンケート調査結果
－平成25年度－

平成26年10月19日
白木 賢信（常葉大学）

Ⅰ 調査結果の概要

1. 利用団体の小学校相当世代への傾斜は依然進んでおり、利用宿泊数は「1泊」と「2泊」の占有率が殆どである。

利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）について、「小学校」「7～12歳」が最も比率の高いカテゴリで、特に「7～12歳」の直近4ヶ年の比率は年々高くなっている。平成21年度までは「中学校」「13～18歳」の比率が徐々に高くなる傾向にあったが、平成22年度以降は小学校相当世代に偏ってきている。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」が全体の殆どを占めながら推移しているが、特に「1泊」の平成25年度の比率は5割を超えている。

2. 利用目標が最も比率の高い「自主性や協調性、社会性を身につける」が突出してきているのは変わりなく、利用目標の達成度についても「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆ど占めている。

利用目標の種類について、7ヶ年とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標で、この比率が突出しているのは変わらない。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆どで、「ほとんど期待できなかった」は毎年度5%未満で、「まったく期待できなかった」は平成21年度以外は0%である。

3. 利用後の参加者の変容について、上位3項目は7ヶ年とも変わらないが、平成24年度以降「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない他）」の比率が上昇傾向にある。

利用後の参加者の変容について、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」の上位3項目は7ヶ年とも変わらないが、平成21年度以降1ヶ台の比率で推移していた「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない他）」が平成24年度から10%台に達し上昇傾向にある。

4. 繰り返し利用することによって予想される変容について、上位3項目は6ヶ年とも変わらないが、次いで高い項目は、平成24年度以降は「自然を大切にようになる」が続いている。

繰り返し利用することによって予想される変容について、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は6ヶ年とも変わらないが、これらに続く項目については、平成23年度までは「仕事などを積極的にようになる」が第4位であったが、平成24年度以降は「自然を大切にようになる」が第4位となっている。

II 調査の概要

1. 目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示するが、昨年度に引き続き、ここでは平成19～25年度の7年間における経年変化の傾向もあわせて提示することにした。

2. 内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

- (1) 利用団体の種類
- (2) 利用団体の主たる年齢層
- (3) 利用宿泊数
- (4) 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
- (5) 利用目標の達成度
- (6) 利用後の参加者の変容
- (7) 繰り返し利用することによって予想される変容

3. 対象

平成25年度のセンター利用団体

4. 方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は次の通り。

- (1) センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
- (2) 各利用団体担当者は、センター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

5. 調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率） 165（29%） 有効回収率 165（29%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成25年度における統計上のセンター利用団体数（569団体）を母数としている。

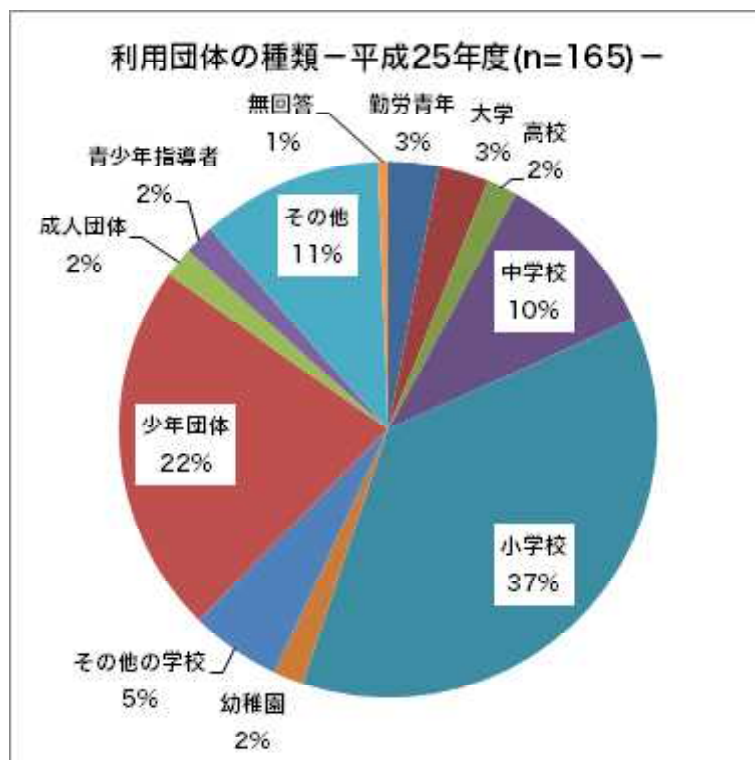
6. 実施期間

平成25年4月～平成26年3月

III 調査の結果

1. 利用団体のプロフィール

ここでは、本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが（図1）、最も比率が高いのは「小学校」の37%で、次いで高いのは「少年団体」の22%、さらに「その他」の11%が続いている。なお、学校関係は59%で全体のほぼ6割を占めている。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

スポーツクラブ(3)、一般企業、おやこ劇場、(学習)塾(小学生～高校生)、学童、学童保育クラブ、家族による自助グループ、行政主催の中学生を対象とした研修の団体、キリスト教会、こども会、山岳協会、地方公共団体、ファミリーキャンプ幅広い世代の集まり、ボーイスカウト函南第1団、まちづくりセンター、民間企業(体育事業)

図1 利用団体の種類

この利用団体の種類の平成19～25年度間の変化について示したものが図2である。これによると、最も比率の高い「小学校」については、平成24年度に続き30%台後半で推移している。「少年団体」「その他」「中学校」の3種類は、平成22～24年度では「小学校」に次ぐ種類として10%台に収斂されつつあったが、平成25年度では「少年団体」が20%台となり、「その他」や「中学校」との差がそれぞれ10ポイント以上に開いている。その他の種類はいずれも1ケタ台の比率で推移している。

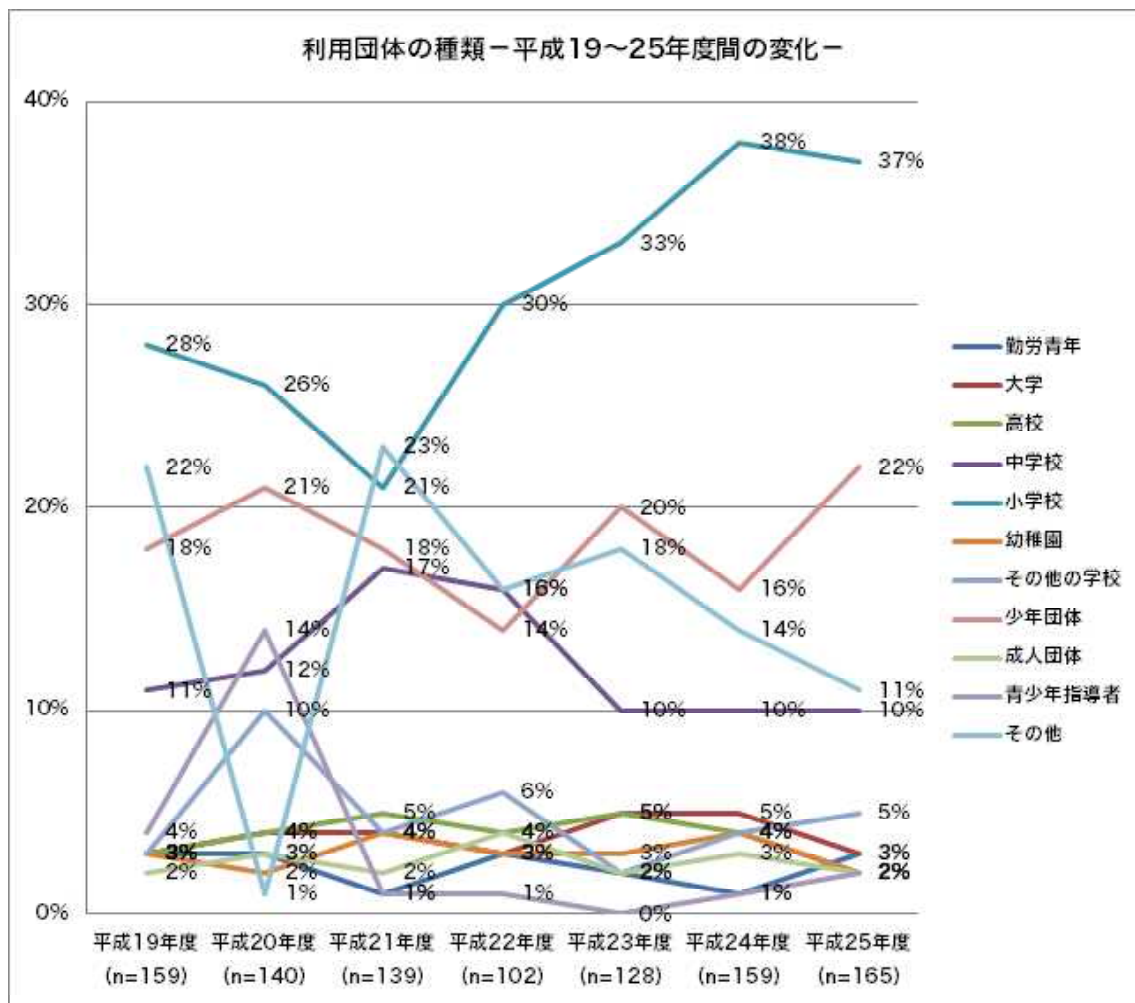


図2 利用団体の種類－平成19～25年度間の変化－

次に、利用団体の主たる年齢層については（図3）、「7～12歳」が67%で最も高く全体の2/3以上である。次いで高いのは「13～18歳」の19%である。

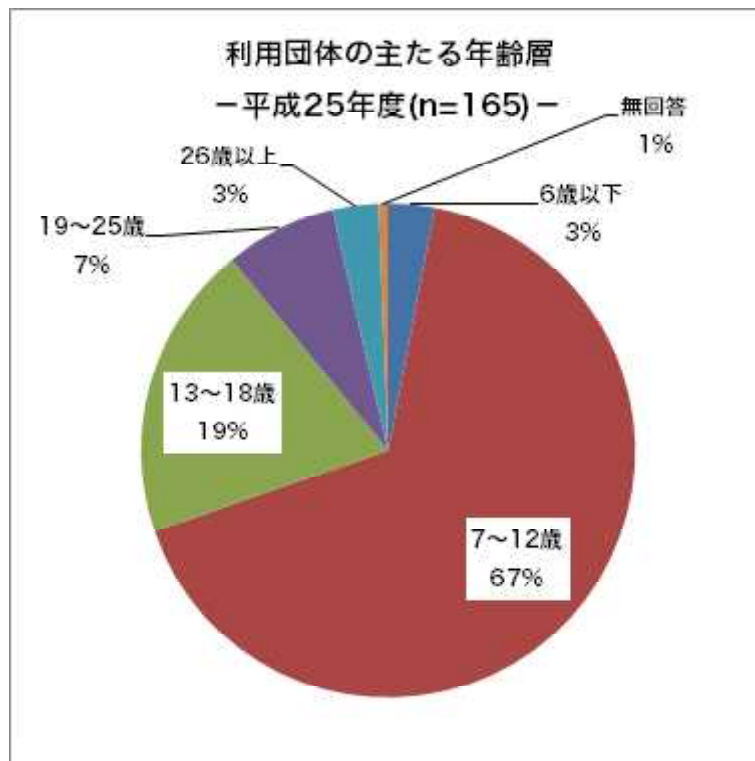


図3 利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を平成19～25年度の変化で見ると(図4)、7ヶ年とも最も比率の高い「7～12歳」は平成25年度になり最高比率に達している。次いで高い「13～18歳」の比率は平成23年度以降は20%前後で推移している。なお、その他の年齢層はほぼ横ばいで、1ケタ台の比率で推移している。

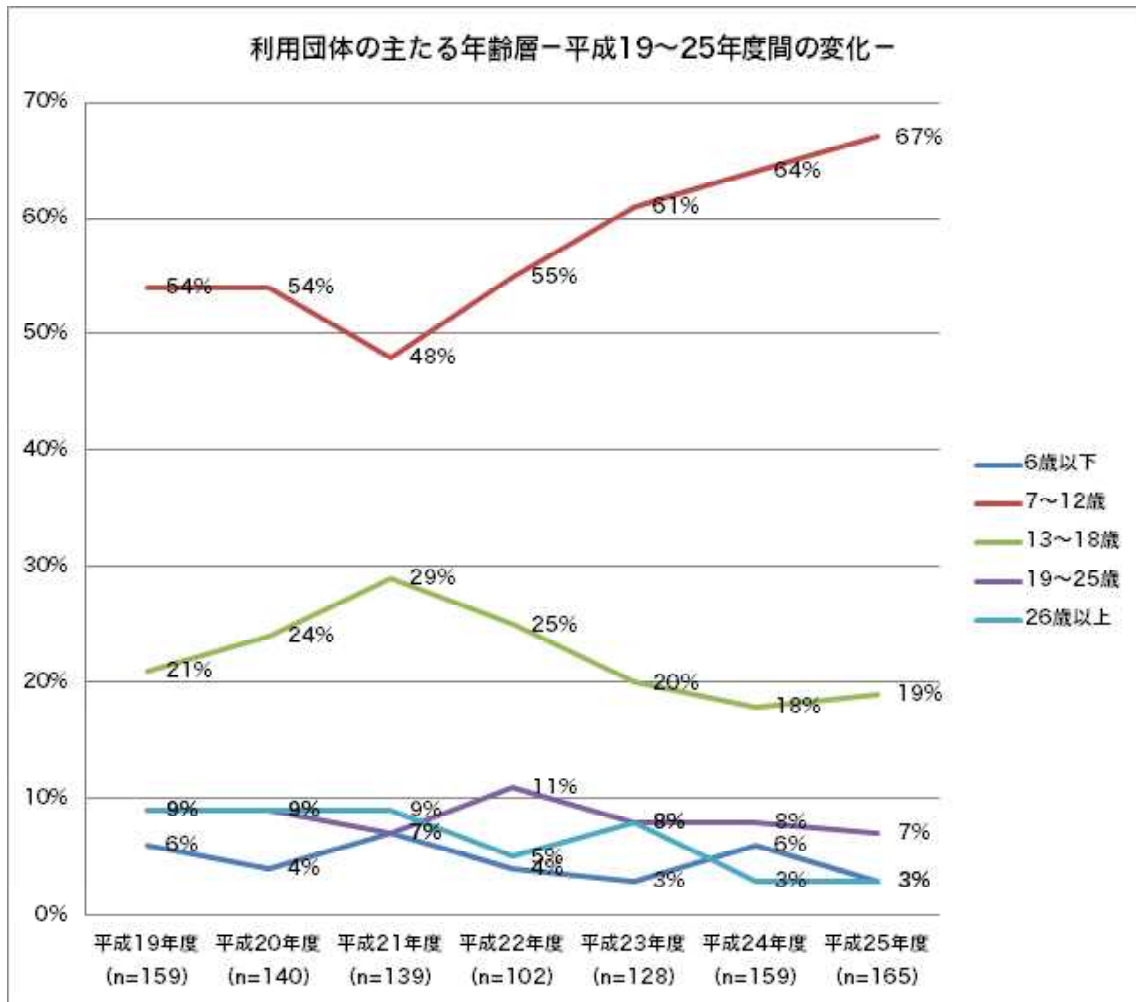


図4 利用団体の主たる年齢層－平成19～25年度間の変化－

さらに利用宿泊数については（図5）、「1泊」の比率が最も高く（52%）、全体の半数以上を占めている。次いで高い「2泊」（39%）も40%近くで、両者で全体の9割以上を占めている。

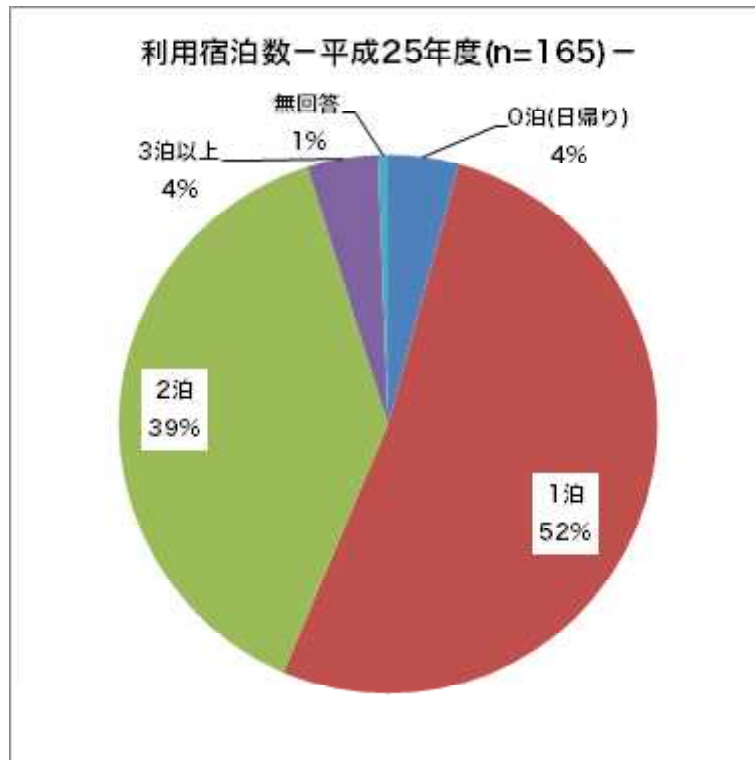


図5 利用宿泊数

この利用宿泊数を平成19～25年度間の変化で見ると（図6）、「1泊」と「2泊」の全体における占有率は9割前後で推移している。両者に次いで比率の高い「0泊（日帰り）」、「3泊以上」の比率は年々接近してきており、平成25年度で同比率（4%）になっている。

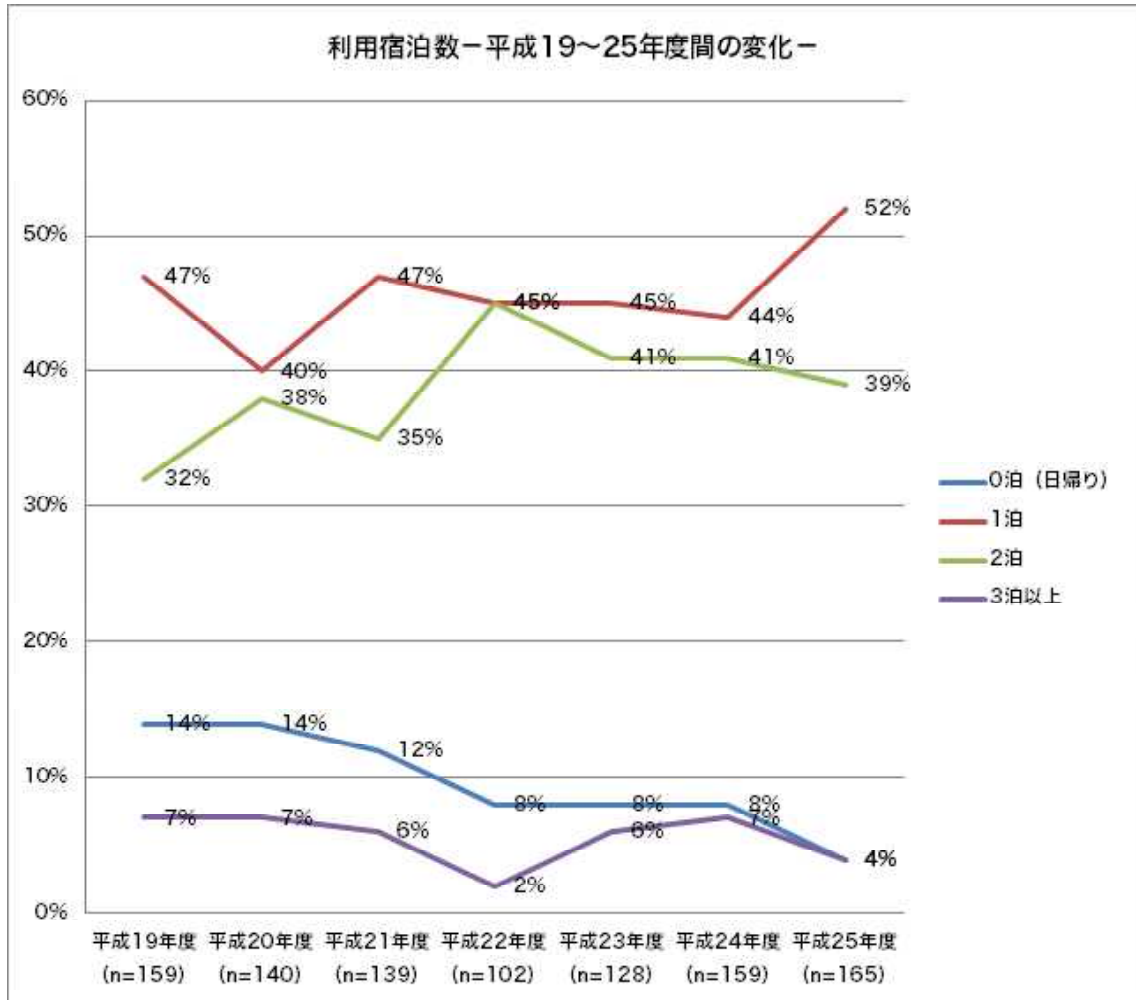


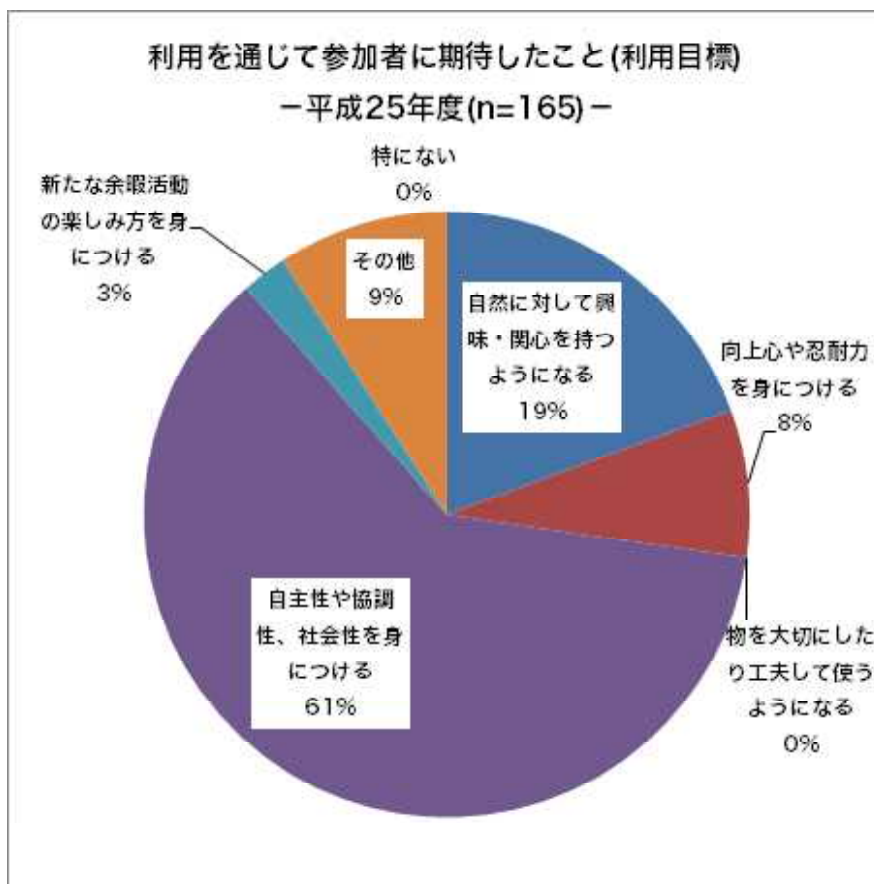
図6 利用宿泊数－平成19～25年度間の変化－

2. 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成8年7月24日）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記URLを参照（平成26年10月18日現在）。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm

図7で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」の61%で、次いで「自然に対して興味・関心を持つようになる」（19%）、「その他」（9%）が続いている。



「その他」の内訳

秋の大会へむけて技術の向上と部員や保護者同士の親睦を深めること、与えられている恵みに感謝し一歩前進する、近江八幡市・富士宮市児童の交流を深める、学生間の親睦、共同生活で連帯感・責任感を持たせる、自然を通して聖書のお教えに耳を傾ける、指導者の資質・能力を身につける、市内の施設について知る、自分でできることにチャレンジし友だちをたくさん作る、障害のある子どもを持つ家族の相互理解、新入生との親睦を深める、スケートがすべれるようになること・星空に興味を持つこと、定期演奏会に向け演奏曲を仕上げる、仲間との親睦を深める、ビジネススキルアップ

図7 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の平成19～25年度の変化については（図8）、「自主性や協調性、社会性を身につける」は7ヶ年を通じて最も比率の高い項目で60%前後で推移している。次いで比率の高い項目は年々変化が見られ、「その他」（平成19年度）、「自然に対して興味・関心を持つようになる」（平成20年度）、「向上心や忍耐力を身につける」（平成21年度）、「その他」（平成22年度および平成23年度）、「自然に対して興味・関心を持つようになる」（平成24年度および平成25年度）となっている。

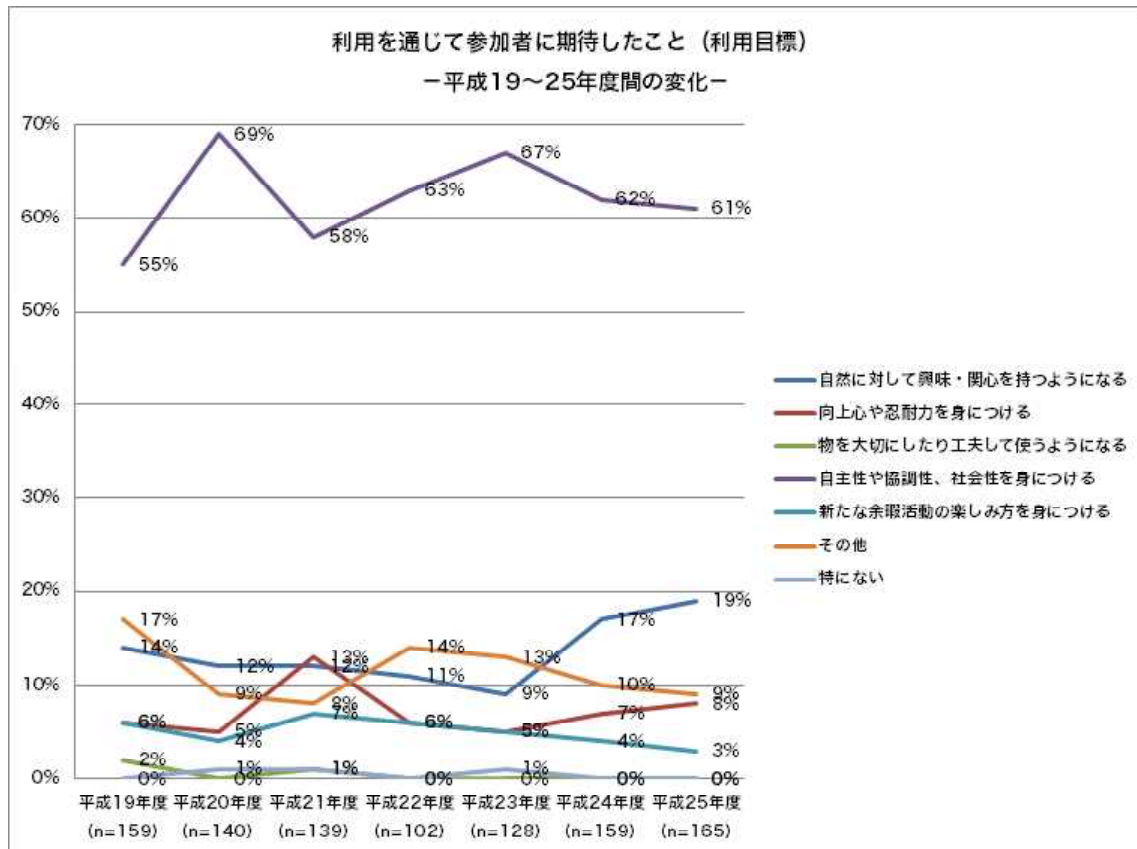


図8 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）－平成19～25年度間の変化－

3. 利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」のいずれかで各団体自身が判断した（回答者は利用団体担当者であるが、その選定は各団体の任意による）。

その結果、図9のように、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（78%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の19%となっており、両者が全体の殆どを占めている。

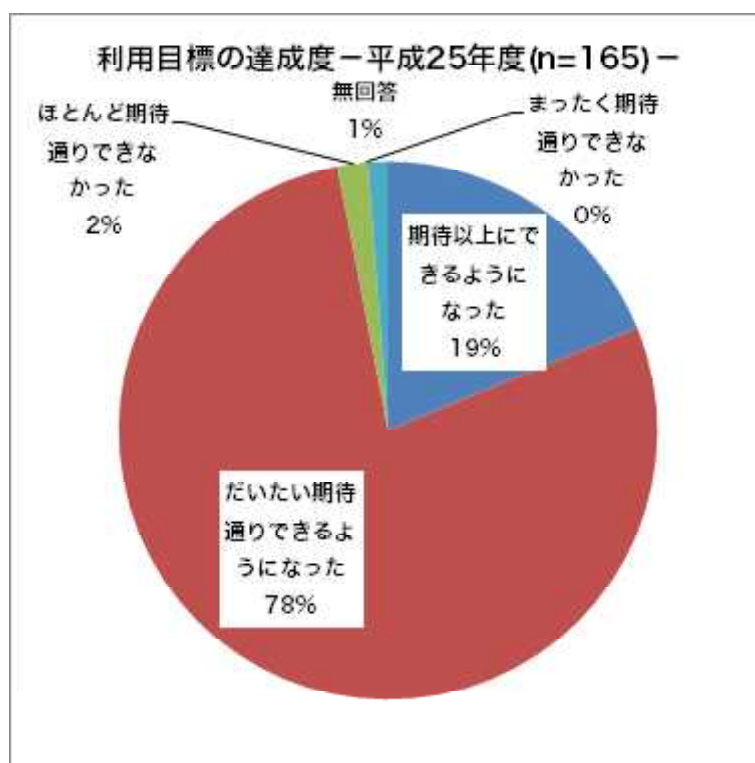


図9 利用目標の達成度

この達成度の平成19～25年度の変化については（図10）、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率は7ヶ年を通じて90%を超えている。一方、「ほとんど期待できなかった」の比率については、毎年度5%未満で推移しており、「まったく期待できなかった」は平成21年度（1%）以外は0%である。

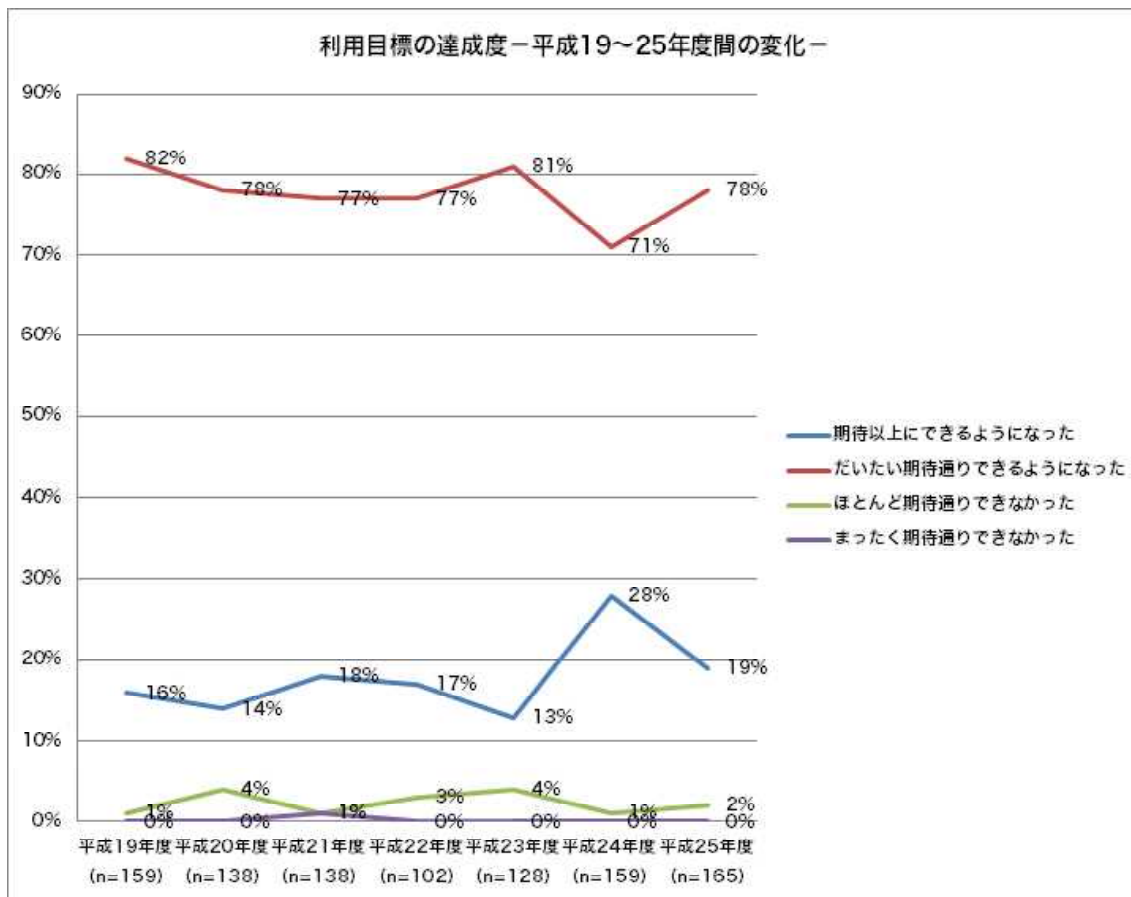
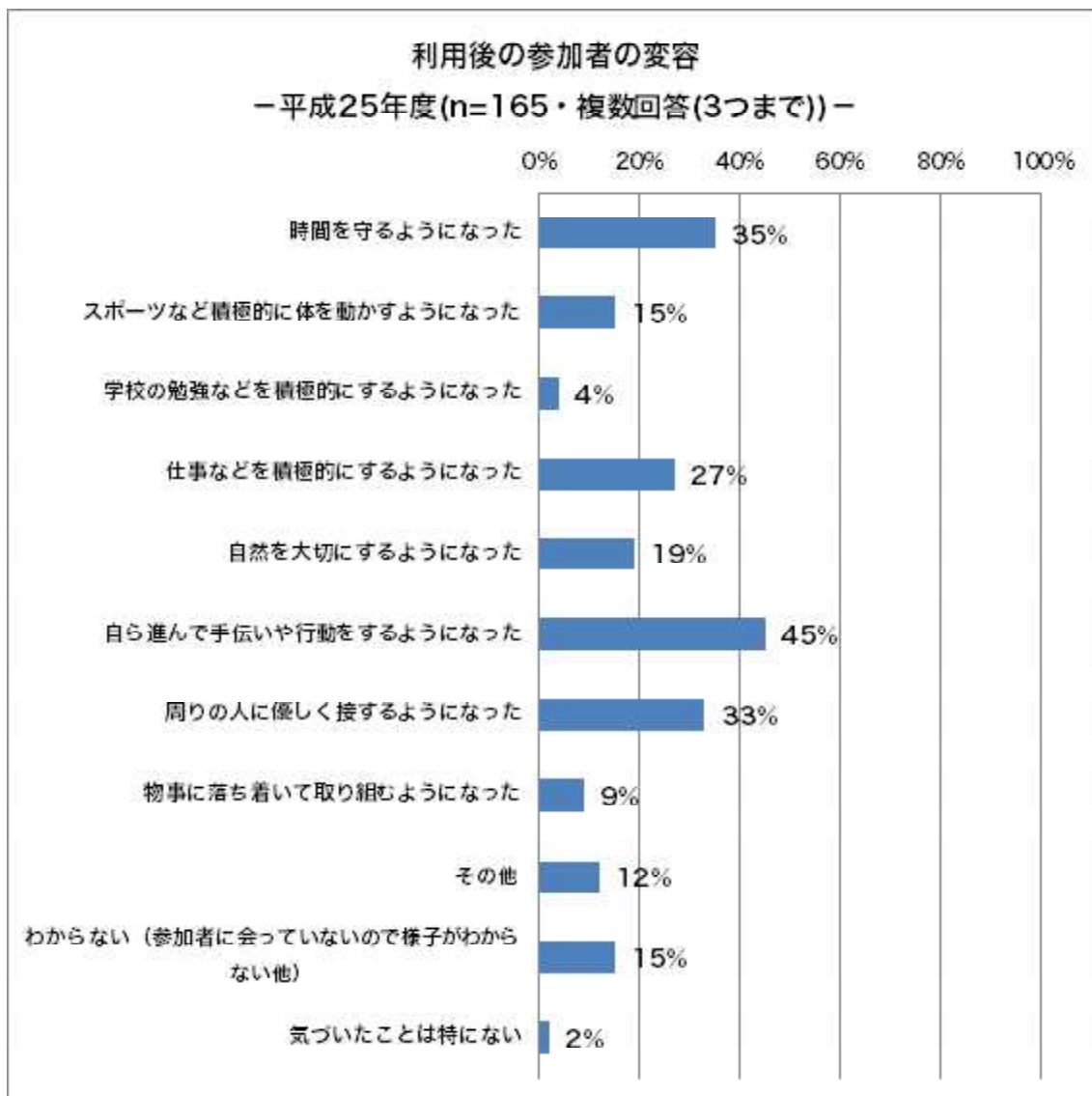


図10 利用目標の達成度－平成19～25年度間の変化－

4. 利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3つまで）、その結果は、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」（45%）が最も高く、次いで「時間を守るようになった」（35%）、「周りの人に優しく接するようになった」（33%）である（図11参照）。



「その他」の内訳

あいさつが元気よくできるようになった、あいさつを大きい声でできるようになった、遊びを工夫したりマナーやルールを意識するようになった、学年で集合する時私語が減った、家族単位の交流が増えた、キャンプが好きになった、教員の取り組む姿勢への理解が増した、協力しようとする意識が高まった・責任を果たそうとする態度が身についた、協力する姿が見られるようになった、自信がついた、下の子にやさしく接することができた、上級生と下級生・同級生同志も親睦が深まった、定期演奏会に向け気持ちが引締ってきた、同期の大切さが分かり仲間意識が高まった、仲間と協力する姿勢が見られた、仲間と接する場面が増えた、富士山の迫力とセンター周りの緑のすばささに感動した、物や公共の場を大切にするようになった、●●(判読不能)の事を考え行動するようになった

図11 利用後の参加者の変容

この平成19～25年度間の変化について（図12）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「時間を守るようになった」「周りの人に優しく接するようになった」は7ヶ年通じて上位3項目で変わりなく、30～40%台で推移している。但し、平成23年度以降に限っては、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」のみが40%台を維持している。これら3項目に次いで比率の高い「仕事などを積極的にするようになった」は20%台で推移している。また、「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない他）」は、平成21～23年度間は1ヶタ台の比率で推移していたが、平成24年度から10%台に達し上昇傾向にある。

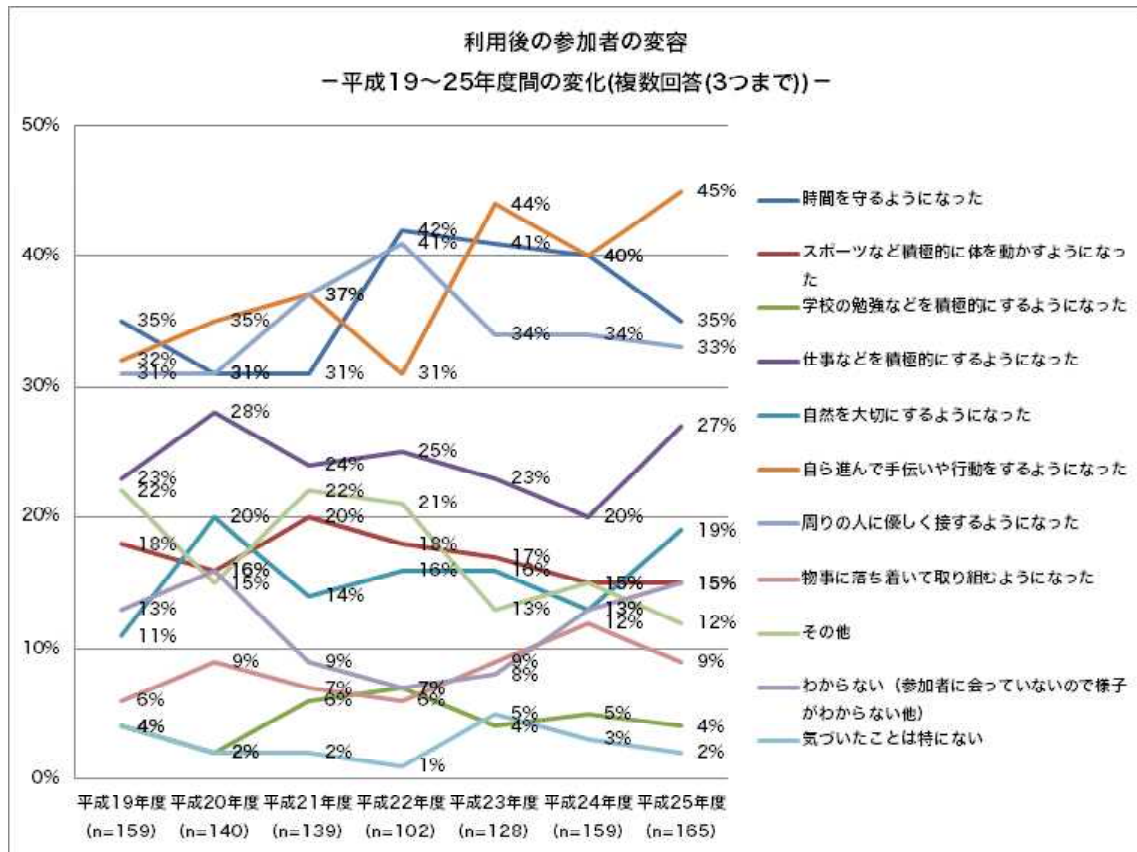
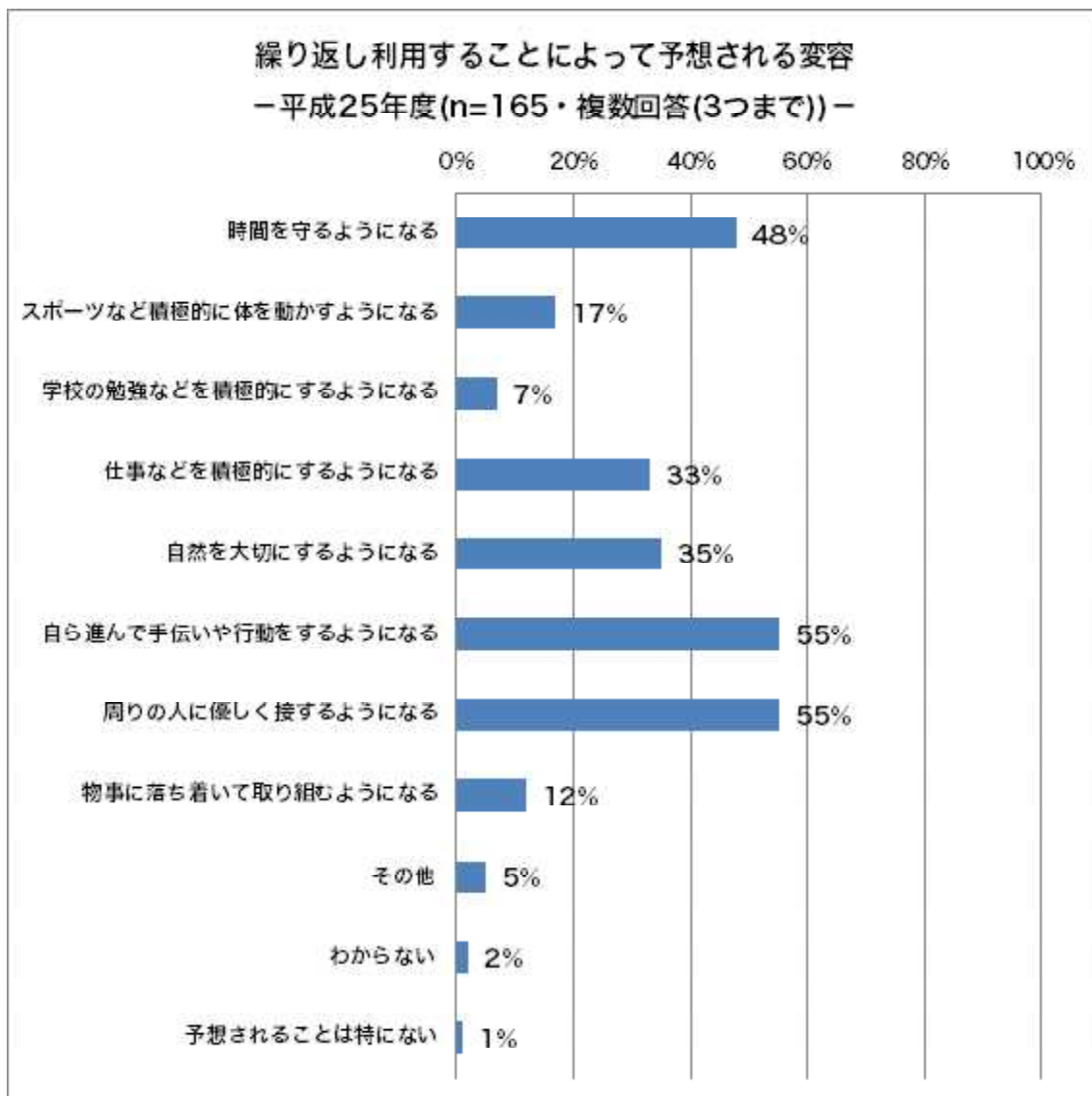


図12 利用後の参加者の変容—平成19～25年度間の変化—

5. 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えている（複数回答・3つまで）。その結果（図13）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」が最も高い比率で55.2%、次いで「周りの人に優しく接するようになる」（54.5%）「時間を守るようになる」（48%）となっている。



「その他」の内訳

新たなことにチャレンジするようになる、生きる目標・意義を求め続けるようになる、いっしょに過ごした友だちのことを意識・関心をもちよりよい関わり関係ができるきっかけになる、学校・教員との信頼関係が増す、協力して活動しよう・自分の責任を果たそうとする態度が身に付く、自信がつく、仲間と協力し合うようになる、日々の業務に前向きにとりくむようになる

図13 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は平成20年度調査から加わった項目であるため、図14の通り6ヶ年の変化を示すことになるが、それによると6ヶ年とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わらない。但し、「周りの人に優しく接するようになる」は平成

23年度以降上昇傾向にあり、平成25年度の比率は平成23年度よりも20ポイント近く高くなっている。次いで、「仕事などを積極的にするようになる」と「自然を大切にするようになる」が30%前後で推移している。そのうち、平成23年度までは「仕事などを積極的にするようになる」が第4位であったが、平成24年度以降は「自然を大切にするようになる」が第4位となっている。

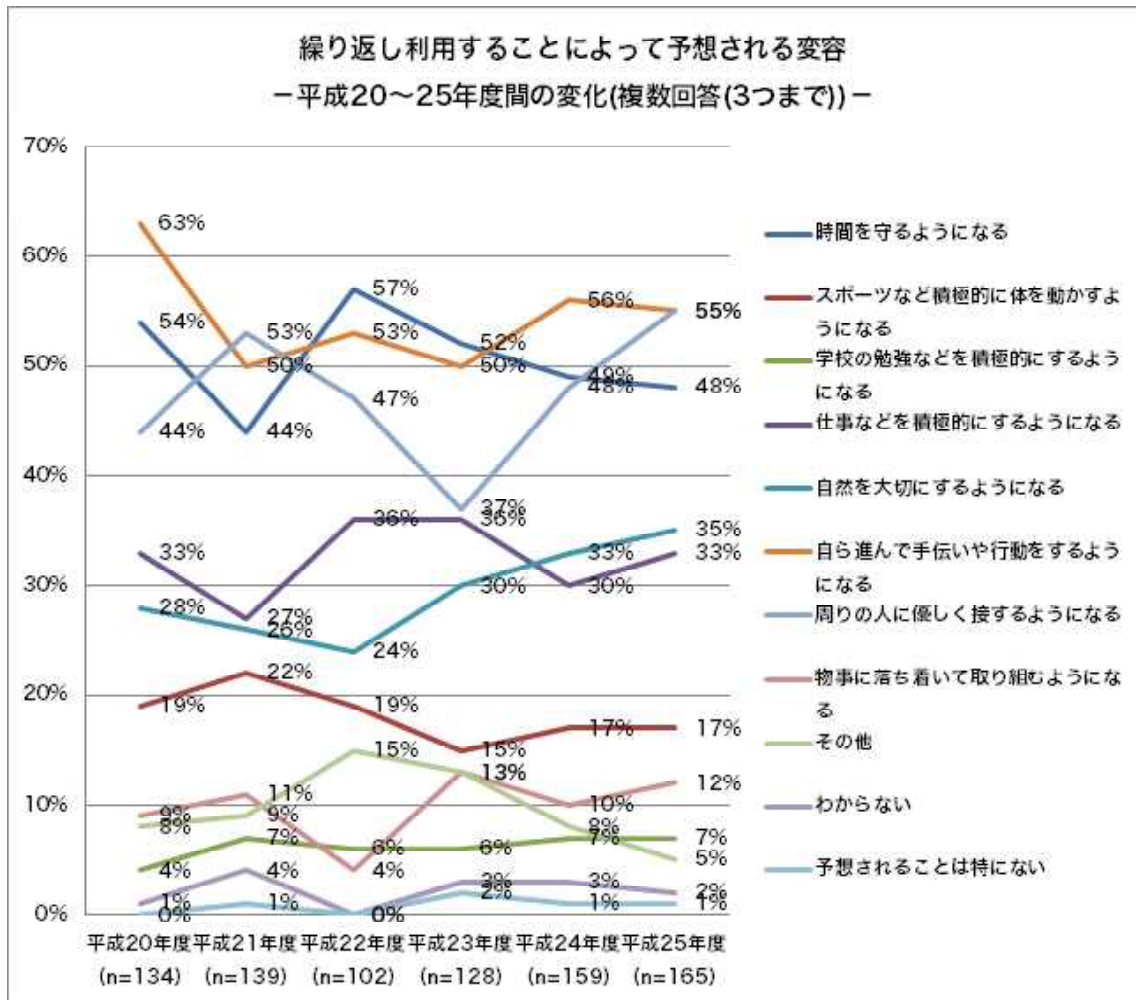


図14 繰り返し利用することによって予想される変容－平成20～25年度間の変化－

IV 調査結果のまとめと今後の課題

今回の調査結果は、次の4点にまとめることができる。

第1に、利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）について、「小学校」「7～12歳」が最も比率の高いカテゴリで、特に「7～12歳」の直近4ヶ年の比率は年々高くなっている。平成21年度までは「中学校」「13～18歳」の比率が徐々に高くなる傾向にあったが、平成22年度以降は小学校相当世代に偏ってきている。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」が全体の殆どを占めながら推移しているが、特に「1泊」の平成25年度の比率は5割を超えている。

第2に、利用目標の種類について、7ヶ年とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標で、この比率が突出しているのは変わらない。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆どで、「ほとんど期待できなかった」は毎年度5%未満で、「まったく期待できなかった」は平成21年度以外は0%である。

第3に、利用後の参加者の変容について、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」の上位3項目は7ヶ年とも変わらないが、平成21年度以降1ケタ台の比率で推移していた「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない他）」が平成24年度から10%台に達し上昇傾向にある。

第4は、繰り返し利用することによって予想される変容について、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は6ヶ年とも変わらないが、これらに続く「仕事などを積極的にするようになる」と「自然を大切にようになる」については、平成23年度までは「仕事などを積極的にするようになる」が第4位であったが、平成24年度以降は「自然を大切にようになる」が第4位となっている。

最後に今後の課題について、今年度新たに見られた傾向の検証の観点から述べておくと、次の2点が挙げられる。

その第1は、利用目標の達成度と利用後の参加者の変容（および繰り返し利用することによって予想される変容）の関係分析である。さらに両者（およびその関係）を規定する要因として、利用目標の種類、利用団体のプロフィール、センターの環境条件等さまざまなものが考えられるが、そのうち何であるかまでは未解明なので、それらの要因分析も進めることが期待される。

第2は、利用後の参加者の変容について、「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない他）」の比率が高まっている点の原因分析である。このことは、調査手法の特徴（各利用団体担当者がセンター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答の上でファックスで送付）が絡んでいる可能性も考えられるので、それとあわせてサンプルの特徴（平成25年度に入り「少年団体」の比率が若干高くなっている）に変化が生じてきたのかどうか検討する必要があろう。